

# トリスタン伝説とゴットフリート・フォン・シュトラースブルク

Die Tristansage und Gottfried von Strassburg

斎藤 芙美子

(1)

「トリスタンとイゾルデ」といえば、すぐワグナー（Richard Wagner）の楽劇が頭にうかんでくるが、トリスタン伝説はヨーロッパではまことに古くから存在していたものである。その起源をたどれば、九世紀ごろにスコットランドに住んでいたピクト人の英雄伝にまで溯れるといわれている。ピクト人というのは、スコットランドにいた非インドゲルマンの先住民であると以前は考えられていたが、今日ではピクト人というのもケルト人か、或は少くともケルト化していた人種とみなされている。トリスタン（Tristan）という名前は、八世紀の終りごろ、北スコットランドを支配していたピクト人の王 Talorc の息子、Drust（或は Drostan と呼ばれているが）に起源しているというのが定説になっている。

このピクト人（ケルト人）たちの間に流布していたのが、いわゆるモーロルト物語である。コーンウォールの若き英雄トリスタンが、年

トリスタン伝説とゴットフリート・フォン・シュトラースブルク

貢として少年たちを要求する巨人モーロルトを打ち倒すが、自分自身も毒槍で傷つけられ、その毒から救う道を知っている唯一の人、すなわちモーロルトの妹を探し求めて冒険の船旅に出かけ、傷いえて再びコーンウォールに戻ったという話である。この話に十一世紀ごろにはイゾルデの物語がつけ加えられていたと考えられている。すなわち、マルケ王の妻イゾルデは夫の甥トリスタンに恋をし、嘲りの言葉を弄して、とうとうトリスタンをして伯父であり、主君であるマルケ王を裏切らせ、森へ一緒に逃避させる。そしてマルケ王に発見され、死の傷を負ったトリスタンは、死の直前にイゾルデを抱擁しながら自分の胸の上で締め殺したという物語である。

以上がケルト人たちの伝えていたトリスタン物語であろうとランケ（Friedrich Ranke）は推定している。これを第一段階とすれば、ランケの考えでは、第二段階は恋の媚薬のモチーフが加わって、物語としての統一がなされ、第一段階では罪深い恋であったのが、罪なき恋に変えられた段階である。しかしこの段階でも物語は森での生活と二

人の死で終わっていたと考えられている。

だが現存するヨーロッパ各国のトリスタン物語は、この森の生活で結末をつけているものではなく、森で見つけられたイゾルデは、マルケ王の宮廷へつれもどされ、トリスタンはコーンウォールから追放され、「白い手のイゾルデ」と呼ばれていた別人の娘と結婚することになった後日談にまでおよんでいる。この「白い手のイゾルデ」が導入され、現存するトリスタン物語の母体となったと推定されるものが、シエッペルレ (Gertrude Scheppele) の名付けた「エストワール」 (Estoire) と呼ばれるものである。これが第三段階だと考えられているのだが、この「エストワール」が、いつ、どこで、誰の手によってつくられたものかは、はっきりしていない。しかし現在では、一五〇年ごろ、当時のフランス文学の中心地になっていたポアトゥウ (Poitou) 宮廷、特にエレオノーレ (Eleonore 1122-1204) 王女のもとに仕えていた一詩人によってつくられたものであろうと推定されている。

エレオノーレの祖父、ポアトゥウ伯爵で、アキテーヌ公爵であったウイヘルム九世は、最初のプロヴァンス地方のトルバドール (吟遊詩人) として世に知られた人であり、一一三七年十五才で父ウイヘルム十世を亡くしたエレオノーレは、当時ヨーロッパで最も大きな資産を嗣ぐことになり、その支配する領土はフランス国王の領土を凌いでいたといわれる。それ故であろうか、遺産を嗣いだ年に、フランス国王ルイ七世と結婚している。だが夫と共に参加した十字軍遠征中に不和が生じ、一一五二年に離婚し、アンジューのアンリ伯爵と結婚し、

一一五四年夫がイギリス国王ヘンリー二世となると同時に、ロンドンへ移り住んだ。

ポアトゥウのエレオノーレの宮廷がトルバドールの最大の中心地であったように、ヘンリー二世も芸術、学問の寛容な保護者であったし、エレオノーレとルイ七世との間に生まれた娘マリーは、アーサー王物語 (Arthurroman) を創り上げ、中世文学に一時期を画したといわれるクレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の後援者として知られ、またヘンリー二世との娘マチルダはドイツのヴェルフ家の獅子王ハインリヒと結婚し、その宮廷もドイツの詩人たちにとって中心地となっていた。

このようにみえてくると、ポアトゥウ宮廷でつくられたと考えられる「エストワール」を母体として、その後エレオノーレ一族の支配した領地で、それぞれトリスタン物語が書かれることになったのも不思議ではない。しかし、このような三段階にわたって発展してきたと考えられるトリスタン伝説のここまでの段階には、断編すら残されているわけではなく、「エストワール」を母体としていると考えられるその後の段階から、ようやく断編が現存することになる。

現在ではこの「エストワール」から三つのトリスタン物語が十二世紀につくられたというのが定説になっている。その一つは、一一七〇年前後のアングロ・ノルマン人であったトマス (Thomas) が、おそらくヘンリー二世の宮廷で、アングロ・フランス人のためにつくったと思われるノルマン・フランス語による作品であり、その二は獅子王ハインリヒの家臣であったオーベルクのアイルハルト (Eilhart von

Oberg) が、同じ頃中部ラインの方言的文学語でかいた作品であり、その三は、一一九〇年ごろノルマン方言でかいたベルール (Beroul) の作品である。

この三つのトリスタン物語のうちで、十三世紀以降に大きな影響を及ぼしたのは、トマの宮廷風叙事詩であった。まずシュトラースブルクのゴットフリート (Gottfried von Strassburg) がトマの作品をもとに、「トリスタンとイゾルデ」 (Tristan und Isolde) を書いたのにつづき、一二二六年にはトマのノルウェー語訳 (Tristanssaga) が僧ローベルト (Robert) によってなされた。そして一二三〇年ごろには英語訳 (Sir Tristrem) ができている。

また一二二五年から三五年ごろには、「エストワール」及びそれ以前の素材をもとにつくられたと考えられるフランス語の散文トリスタン物語が、騎士出身のルカ (Lucas de Gast) の手によって書かれた。このフランス語の散文トリスタン物語は、十四世紀から十五世紀にかけてもっとも大きな影響を及ぼし、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、英語、ポーランド語、ロシア語にまでつくりかえられることになる。

しかしドイツでは、アイルハルトの (Tristan) をもとにした散文が「トリストラントとアイルランドの美しいイザルデンの物語」 (die histori von herren Tristrant und der schoenen Isalden) という題で一四八四年にアウグスブルクで出された。この散文はドイツの民衆本として十七世紀にいたるまで版を重ねている。またこのドイツ語散文から、工匠詩人ハンス・ザックス (Hans Sachs) は、一五五三

年「トリストラントと美しい王妃イザルデンの悲恋にまつわる二十三人の悲劇」 (Tragedia mit 23 personen, von der strengen lieb herr Tristrant mit der schönen königin Isalden) という題で初めて戯曲化を試みている。

十八世紀にもトリスタンを題材とした詩作はなされたようであるがその大部分は忘れられてしまっている。そして十九世紀にワーグナーが楽劇 (Tristan und Isolde) を創作することによって、中世文学のトリスタン物語に新しく一つの解釈を与えたということができ

る。以上がヨーロッパにおけるトリスタン物語の発展史の概要である。

## (2)

さて、筆者が取り扱いたいと考えているゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」は、ヴォルフラム (Wolfram von Eschenbach) の「パルチヴァール」 (Parzival) と並んで、中世文学が最もみごとに花開いたシュタウフェン王朝時代の最高峰と評価されているものである。だが作者ゴットフリートの生涯については、ヴォルフラムよりも、もっと知られていないばかりか、「トリスタンとイゾルデ」が彼の唯一の作品であろうと考えられる。しかも未完に終わったこの物語のどこにも、作者ゴットフリートの名は見出せない。恐らく完成した折には、その末尾で名のはずであったろうといわれている。た

だ、この未完の物語に、アイルハルトの Tristrant へに拠って結末を書き継いだ一二三〇年ごろのウルリヒ (Ulrich von Turheim) や、一二九〇年ごろのハインリヒ (Heinrich von Freiberg) の言葉の中から Meister Gotfric といふ名を見出すだけである。

ゴットフリートが Meister Gotfric と呼ばれ、ヴォルフラムが her Wolfram と呼ばれたことから、meister = Meister 市民階級、her = Herr 騎士階級という区別が従来なされてきたのだが、ヴェーバー (Gottfried Weber) は her と meister という称号は、市民階級、騎士階級の身分を区別するためにのみ用いられたのではなく、もっと多様な意味を含んでいた点に注意を付けている。すなわち、her は騎士や僧侶の呼称につかわれていたばかりでなく、市民階級にも敬意を表す呼び方としてつかわれることもあったのだから、むしろ meister の概念をもっと深く考えねばならないと指摘している。meister という呼称は、単に市民階級を表すだけのものではなくて、修道院付属学校の先生たちも meister と呼ばれていたし、また中世においては、文芸学問に秀れた業績をなした学識者に対しても用いられていたのである。だから、ゴットフリートは、ひょっとしたら十二世紀に創設されているパリ大学で magister の称号を授与されていて、このように呼ばれるようになったのではなからうかとヴェーバーは推測している。

とにかく、ゴットフリートが中世文学の全盛期をつくり出した数多くの詩人たちの中で、もっとも博識の教養人で、ラテン語、フランス語を自家薬籠中のものにしていたばかりか、ギリシャ・ローマの古典

や神学にも精通していたという点では、すべての研究者たちの見解は一致している。だが、騎士階級ではなかったかもしれないが、それだからといって無条件に市民階級の出だともいえないゴットフリートを、どういう身分の人であったと考えるか、という点になると、意見はまちまちである。

ヴェーバーは、ゴットフリートは聖職者ではなかったとしても、clericus であつたらう、と考えている。なぜなら、clericus という語は、中世においては決して聖職者を意味したのではなくて、むしろ修道院付属学校へ入ったが、聖職者にはならず還俗した人のことを指していたからである。また、始めから聖職者になる気はなくて、学問のみを志す人をも clericus と呼ぶ場合もあったようである。こういう意味から、ゴットフリートの博識を考えれば、彼がこの種の学校で学んだ人であることは確かであつて、彼を clericus と呼ぶのが妥当であろう、そして彼はその学識の故に、シュトラースブルクで高い官職についていたであろう、とヴェーバーは主張する。

ゴットフリートについては、その正確な生存年代も不明であるばかりか、「トリスタンとイゾルデ」の成立年代もはっきりしていない。現在では、その成立年代は一二一〇年ごろであろうと推定されている。その根拠となっているのは、彼の作品の中で、後世 Tristans Schwerleite へ (トリスタンの佩刀) と呼ばれている章においてゴットフリートが批評した同時代の詩人たちとの年代比較なのである。とくに、多くの研究者から比較されるのが、ヴォルフラムとの関係である。ゴットフリートはその詩人批評の中で、ヴォルフラムの名を直接

あげることはしていないが、Vindære wilder mære, / der mære wildenære (野卑な物語のつくり手たち、物語の剽盗たち四六六三、四行)とヴォルフラムとその追隨者たちのことを非難したことから、ゴットフリートは、「パルチヴァール」の一部は少くとも読んでいたと考えられてきた。しかもヴォルフラムが彼の「ヴィレハルム」(Wilehalm)の中で、ゴットフリートの非難に論難していることから、「トリスタン」は「パルチヴァール」と「ヴィレハルム」の間、すなわち、一二一〇年から一二一七年の間に成立したとする説も出されたが、ヴォルフラムはすでに「パルチヴァール」の中で、とくにそのプロローグの部分で「トリスタン」のことを意識しているという説もあって、確かなことはわからない。

この時代の文学作品は、印刷機で一度に刷り上げたものが普及するという時代ではないから、後から改作したり、挿入したりということが容易であったと思われる。だからどちらが先に非難したかは決定しがたく、仮説の立て方によって、成立年代の推定に数年のずれが生じるのである。

ヴェーバーは、一二一二年にシュトラースブルクで最初の大きな「異端裁判」がひらかれたことを重視して、ゴットフリートの擲筆は、それ以前であろうと推論しているが、この推論はたいへん興味深い。なぜなら、ゴットフリートの「トリスタン」には、中世のキリスト教世界を越えた独自の価値観が展開されているからである。ランケが「神ではなく、古代のヴィーナス、愛の女神を頂点とした新しい存在体系のピラミッド」と呼び、ケーファーシュタイン(Georg Kefenstein

トリスタン伝説とゴットフリート・フォン・シュトラースブルク

)が「宮廷社会の減価」と呼んだものは、まさにゴットフリートの独自の価値観なのである。この点については、稿を改めて論じたいと考えているが、このような独自の価値観の持主であったゴットフリートが、「異端裁判」を迎えた社会情勢のもとでは筆を取らなかつたと考えるのが、もつとも妥当であるように思われる。

(3)

では、一二一二年にシュトラースブルグで「異端裁判」が行われるにいたった当時の中世社会は、どのようなものであったのか、簡単に触れておきたい。

フランク王国のカール大帝が、ローマ法王レオ三世の手から、神聖ローマ帝国皇帝に戴冠された八〇〇年をもって、中世ヨーロッパの基礎ができ上ったと一般にいわれている。ゲルマンの子、カール大帝は、ローマ・カトリックの忠実な担い手として、ヨーロッパ統一という偉業をはじめてなしたのであったが、彼の死後、ヨーロッパは再び分裂し、のちのドイツ、フランス、イタリアとなる国境線を引くことになった。

そこへ九世紀後半から十世紀にかけて、北からノルマン人、東からマジャール人、南からサラセン人という異教徒の侵入が相次いでおこってくる。しかし異教徒の侵入者たちによって破壊された中世ヨーロッパは、やがて防禦の態勢をたて直し、キリスト教の布教という大義の

もとに、北欧の開発、東方への植民運動をひきおこすようになる。侵入者たちの中でも、造船技術と航海術にすぐれ、海賊でありながら商人でもあったノルマン人たちは、早くキリスト教化され、侵入地のフランスやイギリスの地に定住するようになった。

こうした異教の侵入に対して、防禦のために王侯、僧侶が築いた城砦を中心にして、保護を求める人々が聚落を形成し、封建制度の基盤となる荘園を形づくっていった。やがてこのような所領地の持主たちは、君主から騎士、僧侶にいたるまで、各地に散在していた自己の所領地の間を往来したり、また巡礼の名のもとに、農民にいたるまで各地を往来するようになった。

すると、荘園から上る余剰生産物の貯蔵地は、市場として発展するようになる。そこへ遠隔地からも商人が往来するようになり、十一世紀後半ごろには、中世都市としてその形態が整うようになった。社会が安定してくるにつれ、人口は増加し、大規模な開墾増産が可能になり、十二、三世紀の中世の商業復興を迎えたのである。

こうした経済の基盤となった所領地を封土として結びついていた主従関係が中世の封建制度であった。主君と臣下との間に封土の授与によって結ばれる主従関係は、元来個人对个人の関係であって、臣下は忠誠を誓い、軍役に奉仕し、主君の行政を補佐したのに対し、主君は封土を与え、保護したのである。このような身分関係にいたのが騎士階級であって、それは領主と農奴との間に結ばれる隷属的な関係とは本質的に異なるものであった。したがって、騎士階級は主君と相互契約を結んでいる自由人として、この時代の花形になりえたのであった。

この封建的な主従関係の最上位にいた国王皇帝にとつて、カール大帝がレオ三世によって神聖ローマ帝国皇帝に戴冠されて以来、ローマ法王は政治上欠くべからざる後援者であったし、国王皇帝はキリスト教徒として教会の保護と発展のために尽力するという相互依存の関係ができていたのである。この関係は十一世紀中ごろまでは皇帝権の方が法王権を上まわり、皇帝は聖職者に対しても、一種の封土を媒介とした世俗的な主従関係を結んで、聖職者の任命権を手中に治めていた。しかし、十一世紀後半、グレゴリウス七世が法王になると、世俗の皇帝がもっていた聖職者の任命権を否定し、ドイツ国王ハインリヒ四世の破門という象徴的な事件が起こるにおよんで、法王権が皇帝権を上まわる時代に入った。

十二、三世紀はこの法王権のもっとも強大になった時代であった。法王は現世における神の代弁者であり、世俗のすべての人間の上に立ち、精神界のみならず、俗界においても支配者たるべきであるという至高性をかかげて、ローマ法王を頂点とする一大ピラミッドを築き上げたのである。

この法王権の強大な偉力を示した一つに十字軍がある。回教徒の手に奪われた聖地エルサレムを奪回しようという大義名分のもとに、ローマ法王がサラセン人に対する反撃として企てたのが十字軍であり、ローマ法王を頂点として統一がなされ、勢力を回復してきた中世ヨーロッパが地中海世界を再び征服しようとして試みたのが十字軍であった。十字軍は、中世ヨーロッパに封建制度が確立し、隆盛期を迎えつつあった十一世紀に始まり、以後三世紀にわたって、中世の最盛期にくり

広げられたわけであるが、十字軍の中心をなしたのは、封建社会の花形であった騎士階級なのである。

もともと戦闘的なゲルマンの野性をうけついでいる騎士たちが、ローマ法王から聖地奪回という大義を与えられ、キリスト教徒として、異教の回教徒に対した時、騎士たちの野性のエネルギーが、殺戮、略奪、暴行という形で爆発することになったとしても、それは騎士たちの信仰心とはなんら矛盾することはなかった。騎士たちの奮行にも、法王は神の名において祝福を与えた狂乱の時代であった。

このように法王は至高者として皇帝権に対しても優位に立ち、十字軍を組織しては一応の成果を治め、ローマ・カトリックの支配がその隆盛期を迎えた十二世紀末頃から、ローマ教会の教義とは相いれない異端の動きが、中世ヨーロッパに起ってきたのである。狂乱の時代は十字軍運動の産物として、異端思想をはぐくんできたのであった。

十字軍以来、中世都市は急速な発達を上げていた。急激な人口増加、商業の隆盛は、伝統的なローマ教会の手がとどきにくい環境を生み出していた。都市は十二世紀の学問や教育がいち早く復活した所であり、教会の世俗的な権力や富、墮落した僧侶の生活に、もつとも早く批判の目を向けた所であった。このような都市には、十字軍と共に伝わってきた古いペルシャのマニ教の影響をうけた異端思想が広がっていき条件が十分にととのっていたのである。

清貧を説き、聖書主義にもとづいて、福音の自由な宣教を唱え、既存の教会組織を否定した異端思想が、急速に広まるにつれ、弾圧もきびしさを増していった。十二世紀後半までは、異端裁判は司教の管轄

トリストラン伝説とゴットフリート・フォン・シュトラースブルク

に属し、裁判も公開で、刑罰もゆるかったが、十三世紀に入ると、異端裁判は司教の手から、法王直属の審問官の手に移り、非公開のうち極刑を科すまでになっていた。

このように、十二、三世紀は中世ヨーロッパが隆盛期を迎え、経済的にも文化的にも華々しく復興を上げていた中で、社会情勢は大きく激動しつつあった。まさにこの時代に、ゴットフリートは、ローマ時代からライン河沿岸にひらけていた、いわゆるローマ都市であり、司教の所在地でもあり、十二世紀ごろから商人や手工業者が活躍し、遠隔地商業の取引所や通関所として急速に発展していたシストラースブルクに生活していたのである。

#### (4)

このような社会状況にあった十二、三世紀の中世ヨーロッパが生み出した文化は、この時代の担い手であった騎士階級の文化、すなわち騎士文化と名づけられよう。では、この騎士文化の底流にひそむ問題意識、いいかえれば、騎士階級のかかえていた精神的な根本問題は、どのようなものであったのであろうか。これに関しては、デ・ボリア(Helmut de Boor)の卓越した見解をここに引用して、この稿の筆をおきたい。

「一二〇〇年ごろの騎士階級の根本問題は、独自の絶対的な評価を現世で、此岸で、なによりも求めたことによって生じたのである。あ

るいは簡潔な公式に書けば、神と現世の関係を新しい均衡状態におきたいという必然性によって生じたのである。これまで教会は神と現世という対立物を、神の下に現世を位置づけることによって、秩序を維持してきたのであった。

このような現世秩序は——*memento mori* (死を忘れるな) という形でもっとも先鋭化して——十二世紀までは、なんの異論もなく保たれてきたし、また現世的階級としての騎士たちの政治的、経済的、軍事的な向上も、この秩序をおびやかすまでには必ずしもなっていないかった。ただ騎士階級だけが、異教徒に対する布教の時代以来、最初の現実的な世俗的階級であり、実用的な存在にとどまってはおらずに、独自の価値を自覚し始め、その価値を理想的に芸術の上に描き出そうと努めた社会的な階層であった。騎士階級は「現世」と神との結びつきを決して否定はしなかったが、まさにこの現世の中において、彼らの特別の価値を体験してしまつた故に、軍人としての此岸に深く根ざした階級倫理を發展させていった。騎士階級の、この独自の此岸享受的理想を典型的に描き出してみることが、騎士芸術の課題であった。このような方向転換のもつとも明白なしるしとして、騎士芸術は、此岸にしっかりと結びついている古代ゲルマンの英雄という素材を、その理想の表現手段として認識し、それを用いて、キリスト教の布教にとどまっておらずに、前教會的な階級的に強調された典型を詩作することには戻っていった。

だが、この内面的な新秩序の特殊な表し方では、新秩序が旧秩序の減価や、価値変動を同時にひきおこすには至らなかつた。キリスト教

的教會的秩序は、全体としては、疑いのない偉大さとして残っていた。中世の古典文学の中に、したがってまたゴットフリートの中に、ルネッサンス的で、キリスト教に敵対するような傾向を無理に読みとろうとすることは、もとより間違ひである。せいぜい云えることは、ニーベルンゲンの作者にとつても、同じくゴットフリートにとつても、キリスト教のドグマ的なものは問題ではなくて、妥当な、つまるところ規則的な疑いのない偉大さというものが問題であつたということだ。そういう偉大さを十分に扱おうとする彼らの使命は、むしろ、此岸の独自の価値という新しい範疇を、それぞれのやり方で解剖し、把握し、芸術的に描出することであつた。しかも、ニーベルンゲンの作者の場合は、「現世と神」という公式が含んでいる問題性に、手をふれていないといえるほどの取り扱ひ方なのだが。

このような元來静止的な精神状態はたいへん重要な特徴だと思われる。なぜ宮廷文化最盛期の世代が、その熱烈な努力に遂に失敗しなればならなかつたかを、この精神状態がよく明らかにしていると思われ。神を至高者とし、唯一の存在とする、堅固であらゆる点で不動の古い価値体系は、独自の価値を認めようとする現在把握に対して、全然入りこむすきを与えなかつた。それでもこの現世から發展させた価値体系、しかも旧価値世界と決定的に衝突することにはならないような価値体系をつくり上げようとする試みは、賢明な人々に、内心実現不可能だという認識を抱かせざるをえなかつた。

この新しい騎士宮廷社会の価値体系の頂点として、ミンネ(愛)だけが考えられたのである。騎士倫理は一般に宗教的な道徳構造から育

ったものであったように、この新しい現世に目をむけた世代も、キリスト教的思考の基本概念をうけついでおり、それを彼らの独自の新しい思考へ移したのであった。価値体系の頂点はこの世にはなく、彼岸にあり、真の本質的な価値はすべて、経験できる範囲を越えた超越的なものという基本概念をうけついでたのである。したがって、新しい存在の頂点を超越的なものに高めることが課題であった。こういう必要が生じた結果、「高きミンネ」という概念が生まれたのである。「高きミンネ」はもともと感覚的なものを、超越的なものに昇華するものだと云うこともできよう。

このことは抒情詩においても明白にあらわれている。とりわけラインマル (Reinmar von Hagenau) や、その一派が目標として頭に浮べたのは、ミンネの超越的なものへのこのような昇華に他ならない。彼らにとって課題は、ミンネからあらゆる感覚的なものを取り去り、精神的道徳的な力に高め、ミンネが実際に至福を与えると同時に、道徳的な教育をほどこす彼岸的な絶対的な力になるほどの無条件の服従を、ミンネ信奉者に義務づけることであった。ラインマルの新しいしきは、この課題を全く首尾一貫して発展させたことである。

このことから、この輝ける世代の精神状況が特徴づけられる。神に頂点を求めた古いピラミッド型の存在形式は決して否定されたり、解体されたりはしなかった。しかし実際は、このピラミッドは内部からこわされていたのである、というのも、見かけだけは秩序づけられていた現世が、独自の自律的な価値づけを要求しながら、「高きミンネ」の中に、その独自の、また超越的なものとしてとらえられた価値の

頂点を発展させていたのである。このことは、現世と神の新しい均衡の秩序が必然的な要求として生まれてきた基盤である。と同時に、不変の教会的価値体系をそのまま保持しようとする、このような新体系へのどんな試みも失敗せざるをえなかった理由でもあるし、一方をたてれば他方がたたなくなる内面的なパラドックスの悲劇でもある。このことを、また出発点として、一二〇〇年ごろの偉大な文学に対するいかなる考察も、したがってまたゴットフリートの意図の解釈も始めねばならないし、またこの出発点にたてば、ゴットフリートにみられる不協和音も、個人的、個性的なものとは解釈しなただけの認識に至るはずである。」 (大学音楽学部 助教授)

#### 参考文献

- Friedrich Ranke : *Tristan und Isolde*, München, 1925.  
Ders. : *Die Allegorie der Minnegrotte in Gottfrieds Tristan (Schriften der Königsberger Gelehrten Gesellschaft, Geisteswissenschaftliche Klasse Heft2)* Berlin, 1925.  
Georg Keferstain : *Die Entwertung der höfischen Gesellschaft im "Tristan"* Gottfrieds von Strassburg, GRM24, 1936 S. 421-440.  
Helmut de Boor : *Die Grundauffassung von Gottfrieds Tristan*, DVjs. 18, 1940, S. 262-306.  
August Closs : *Tristan und Isolde*, Oxford, 1947.  
Gottfried Weber : *Gottfried von Strassburg*, Stuttgart, 1962.  
兼岩正夫著「西洋中世の世界」  
堀米庸三編世界の歴史「中世ヨーロッパ」